島根県立大学短期大学部出雲キャンパス
研究紀要　第３巻，13－22，2009

基礎看護学実習報告会からみる学生の学びの変化と課題

松岡　文子・吉川　洋子・松本亥智江
田原　和美・平井　由佳

概　要

平成19年度に基礎看護学実習Ⅰ（家庭訪問実習）を核とした取り組みが，特色ある大学教育支援プログラムとして採択された。この採択前後の４年間における報告会でのテーマ・内容と実習協力者のアンケートから学生の学びがどのように変化し，課題は何かを明らかにした。その結果「人間関係・コミュニケーション」に関してはテーマとして取り上げられることが減り，「生き方・人生」に関するテーマが増えており，学生は対象者を「生活者」としてとらえることができていることが示唆された。課題として，「生活者」としての視点を継続して持ち続けられるような指導，「根拠」のある「課題探求」になるよう指導する必要性，実習協力者の希望にできるだけ添える報告会の運営などが明らかになった。

キーワード：基礎看護学実習，家庭訪問，報告会，課題探求，生活者

Ⅰ．はじめに

本学では入院期間の短縮，在宅療養の増加に対応するために，疾病中心ではなく，生活を把握することを重要視した看護教育が必要であると考え，平成７年の開学以来大学周辺の高齢者家庭を２人１組で訪問する基礎看護学実習Ⅰ（以下家庭訪問実習）を１年次後期に実施している。本実習の目的は「看護の対象者を生活している人としてとらえ，健康と生活との関連性を理解するための基礎的能力を養うこと」である。この目標を達成するために，学生には２つの課題を課している。１つめは４回の家庭訪問を実施して捉えてきた情報をもとに，その人の生活が健康にどのように関連しているかを個々で分析・統合し「全体像」としてまとめることである。２つめは課題探求能力を養うために，訪問を通して関心を持った課題・事柄についてグループ学習し，実習協力者参加の報告会において発表・討論を行うというものである。本研究は，その２つめの課題であるグループ学習ですすめる報告会での発表に関連することを中心にまとめることにした。

我々はこれまでに学生が捉えた「全体像」の分析をすることで家庭訪問実習の評価を行い(吉川，1998，長崎，2000)，学生及び実習協力者に対して実施したアンケート調査および報告会のテーマから，地域と連動した実習の成果(吉川，2004）を報告してきた。平成19年度に家庭訪問実習を核とした「地域に広がる新しい看護ニーズに応える教育～地域の教育力の活用と生活者中心の看護教育～」が「特色ある大学教育支援プログラム（以下特色GP)」として採択され，新たにセミナー等を開催し学生のコミュニケーション能力，アセスメント力，プレゼンテーション能力等の強化に努めてきた。これにより学生における実習からの学びがどのように変化しどのような課題があるのかを明らかにすることは，特色GPとしての取り組みの評価になること，また今後の学生指導においてどのような関わりが必要なのかを明らかにすることができるという点において意義があると考える。また，報告会に参加した実習協力者によるアンケートは家庭訪問実習にどのようなことを期待しているかを知る手がかりとなり，実習内容をより充

実させるための資料となると考える。

Ⅱ．研究目的

今回，特色GP採択前後の４年間における報告会の発表テーマ・内容と，報告会に参加した実習協力者のアンケートから，学生の学びの変化と課題を明らかにすることである。

表１　家庭訪問実習の概要

	H18年度まで	H19年度から
実習目的	看護の対象者を生活している人としてとらえ、統合的に理解するための基礎的能力を養う	**看護の対象者を生活している人としてとらえ、健康と生活との関連性を理解するための基礎的能力を養う**
実習目標	1. 対象理解のためにの看護の視点を明らかにし、対象者を生活する人として理解する 1) 対象者の健康状態や健康に対する考え方を知る 2) 対象者の日常生活や生活習慣、生活信条、生活環境について知る 3) 対象者の家族や社会との関係・役割について知る 4) 対象者の個人史を知る	**1. 看護に視点にもとづき、対象者を生活者として理解するための情報収集をする** 1) 対象者の健康状態や健康に対する考え方を知る 2) 対象者の日常生活や生活習慣、生活信条、生活環境について知る 3) 対象者の家族や社会との関係・役割について知る **4) 対象者の個人史から現在の生活や特性に対する影響を知る** **2. 1で収集した情報をもとに、その人の生活が健康維持・疾病予防にどう関係しているかアセスメントする**
	2. 対象者との円滑な人間関係を作るための工夫をする 1) 観察・コミュニケーション技術を活用する 2) 対象者の考え方や価値観を理解し、ありのままに尊重する 3) 対象者のプライバシーを尊重する	3. 対象者との円滑な人間関係を作るための工夫をする 1) 観察・コミュニケーション技術を活用する 2) 対象者の考え方や価値観を理解し、ありのままに尊重する 3) 対象者のプライバシーを尊重する
	3. 実習でとらえたことを言語化し、他者に伝える 1) 対象者（及び家族）の発言や観察したこと、自分が感じたり考えたことを区別して記述する 2) 1の1)～4)の関連性をみながら対象者を統合的に理解し、現時点での「全体像」として記述する 3) 自分の体験を他者に伝え、意見交換をすることで学びを深める	4. 実習でとらえたことを言語化し、他者に伝える 1) 対象者（及び家族）の発言や観察したこと、自分が感じたり考えたことを区別して記述する 2) 1，2の関連性をみながら対象者を統合的に理解し、現時点での「全体像」として記述する 3) 自分の体験を他者に伝え、意見交換をすることで学びを深める
	4. 実習での体験、学びをもとに、今後の学習課題を明らかにする	5. 実習での体験、学びをもとに、今後の学習課題を明らかにする
実習展開	オリエンテーション 4回の家庭訪問 3回のカンファレンス 全体像のまとめ 報告会	オリエンテーション 4回の家庭訪問 3回のカンファレンス **コミュニケーションセミナー** **【医療場面における基本的面接技法】** **・コミュニケーションスキルの基本（講義）** **・患者とのコミュニケーションにおけるチェックポイント（講義）** **・シナリオに沿ったロールプレイ（演習）** **・関連科目において模擬患者参加による面接の実際** **プレゼンテーションセミナー** **【プレゼンテーションの基本的な理論と実践を学ぶ ー家庭訪問実習報告会に向けてー】** **・プレゼンの基本構造とシナリオの組み立て方** **・報告会でのテーマ設定** **・コンテンツとアウトライン** 全体像のまとめ 報告会

注）ゴシック体：平成19年度からの改正点を示す

Ⅲ．家庭訪問実習の概要

本学では家庭訪問実習を開学時より実施している。その実績をふまえ，平成19年度の特色GP申請に併せて実習目的，実習目標，実習方法等の改正を行った。改正前後による実習の概要を表１に示す。同時に我々は，「生活者」という概念について検討し，「生活者とは過去の生活や習慣，出来事に影響を受け，未来に希望や期待をもっている存在であり，またその人を取り巻く家族，地域社会との関わりや役割を持ち，その中で個人の生活習慣や生活信条をもちながら生きている人」と定義した。

家庭訪問は原則として２人１組（学生数によっては３人１組もあり得る）のペアで行うが実習記録は個々で提出する。それぞれが家庭訪問で得た情報を分析・統合し，最終的に「全体像」としてまとめることを通してアセスメント力を養う。一方，報告会は訪問を通して関心を持った課題や事柄に対し，８～10人でグループ学習を行うことで課題探求能力を育成し，看護への視野を広げ，発表することでプレゼンテーション能力を高めることを目的としている。平成19年度からは特色GPとして採択されたことにより学外講師によるコミュニケーションセミナー，プレゼンテーションセミナーを開催することができている。

コミュニケーションセミナーは１回目あるいは２回目の家庭訪問が終了している時期に開催している。このセミナーは対人関係技法としてのコミュニケーションについて，ロールプレイを通して体験的に学び，実践的なコミュニケーション能力を育成することを目的としている。基本的な面接技法についての講義を受けた後，患者役，看護師役，観察者の各役割に分かれシナリオをもとにグループで話し合いをもちながらロールプレイを実施し，振り返りを行っている。

プレゼンテーションセミナーは，３回目の家庭訪問が終了している時期に開催している。プレゼンテーションの基本的な理論と技術を講義で学び，報告会での発表とリンクさせることでテーマの設定の仕方，発表内容の組み立て方など実践を通して体得できるようにしている。

報告会開催については，実習協力者に事前に報告会の日時を往復葉書で案内し，出席を依頼している。また基礎看護学以外の学内の教員にも案内をし，より多くの参加者の下で報告会が開催でき，学生の学びが多角的な深まりとなるよう配慮している。

報告会は２部構成になっており，第１部でグループ毎の発表を２会場で実施している。発表は１グループあたり15分発表，５分質疑応答の計20分間である。すべてのグループ発表の終了後場所を移動し，第２部として学生全員と実習協力者，教員が一堂に会し，忌憚のない意見交換ができるよう全体会を実施している。

Ⅳ．研究方法

１．対象

対象は，平成17年度（学生数：86名，グループ数：10），平成18年度（学生数：82名，グループ数：10），平成19年度（学生数：81名，グループ数：10），平成20年度（学生数：81名，グループ数：８）の４年間分の家庭訪問実習報告会において学生が発表したテーマ全38件と，報告会に参加した実習協力者のアンケートである。アンケートについては，平成18年度は時間の都合上報告会参加者のアンケートを実施できておらず，平成17，19，20年度の３年分のアンケート42名分である。

２．内容と分析方法

報告会のテーマについては，特色GP採択前の２年間分（平成17，18年度）の20件と採択後の２年間分（平成19，20年度）18件にわけ，類似するものをまとめ，カテゴリー化した。カテゴリー化にあたっては，テーマ優先ではなくその内容を十分に吟味し，適切なカテゴリーに含まれるようにした。内容の吟味とカテゴリー化は研究者２名を中心に行い，意見の食い違う部分については再度検討を重ねた。その後５名の研究者で検討し，合意が得られるまで協議した。

報告会に参加した実習協力者に対するアンケートは，報告会に参加した動機と報告会への意見・要望を自由記載で，報告会に参加して感じたことを選択形式（複数回答可）で問うた。

集計は単純集計を行い，自由記載の整理を行った。

3．倫理的配慮

報告会における発表内容については，資料作成の段階で基礎看護学の教員全員で内容を確認し，個人が特定されないかを検討している。今回の研究にあたっては，グループ発表資料として公表しているものを使用した。

実習協力者に対するアンケートの使用については，公表することがある旨を書面にて説明し，無記名で実施し，提出を持って同意を得たとした。

Ⅴ．結果

４年間分のテーマの一覧を表２に，各カテゴリーの割合を図１と図２に示す。平成17，18年度分は「人間関係・コミュニケーション」，「健康」，「生きがい」，「社会制度」，「地域の理解」，「生き方・人生」の６つのカテゴリーに分けられた。最も多かったのは「人間関係・コミュニケーション」と「健康」で各６件（30％ずつ）であり，次いで「生き方･人生」で４件（20％）であった。「生きがい」が２件（10％），「社会制度」と「地域の理解」は１件（５％）ずつであった。内容的には，実習中に学生たち自身が困ったことを中心に，訪問を振り返りどのようにするべきだったのか，今後どのようにすればいいのかを導いているもの，学生たち自身と実習協力者との考え方や生活の仕方などの類似点や相違点を挙げ，まとめたものなどであった。平成19，20年度分は「人間関係・コミュニケーション」，「健康」，「生き方・人生」の３つのカテゴリーに分けられ，「生きがい」「社会制度」「地域の理解」はなかった。最も多かったのは「生き方･人生」の９件（50％）で，半数を占めた。次いで「健康」が７件（38.9％）で，「人間関係･コミュニケーション」は２件（11.1％）であった。内容をみてみると学生たちと実習協力者との対比もあったが，多くは実習協力者がいきいきと元気で暮らしておられる様を分析しているものであった。また「生きがい」はテーマではなく，キーワードとして使用しているものがみられた。

報告会に参加した実習協力者からのアンケート回収のうち分けは，平成17年度が報告会参加者18名中13名（回収率：72.2％），平成19年度は報告会参加者21名中16名（回収率：76.2％），平成20年は報告会参加者17名中13名（回収率：76.5％）で，３年間で報告会参加者計56名中42名（回収率75.0％）であった。実習協力者の報告会への参加動機の内訳を図３に示した。最も多かったのは，家庭訪問の中で自分たちが話をしたことを学生がどのように受け止め，まとめるのかを知りたいというものだった。次いでこの実習でどのように学生の役に立っているのかを知りたいというものであり，いずれも実習を受け入れた意義を見出したいという内容であった。また，実際に報告会に参加して感じたことの結果を図４に示す。最も多かったのが実習に協力した意義を見出せた，次いで学生の学びがわかったであり，参加動機を満たす内容であった。

Ⅵ．考察

1．発表テーマからみる学びの変化と課題

1）「人間関係･コミュニケーション」について

報告会での発表は，先にも述べたが訪問を通して関心を持った課題・事柄についてグループ学習し，まとめたものである。特色GP採択前後で「人間関係・コミュニケーション」の件数に相違がみられた。特色GP採択以前は２年間に限らず「人間関係・コミュニケーション」に関するテーマは多く扱われていた（吉川，2004）。学生のみで見知らぬ人の家に行き，緊張する中で何を話せばよいか，何から話せばよいかあるいはどのように受けとめればよいかなど戸惑い，悩み，自分自身のコミュニケーション能力の未熟さに直面し困惑した学生が多いためだと思われる。しかし，18年度以降は「人間関係・コミュニケーション」をテーマに取り上げるグループが減っている。その背景には，特色GP採択により演習を交えたコミュニケーションセミナーの開催，関連科目の講義でのロールプレイの実施，模擬患者への面接実施などコミュニケーションに関する講義・演習を充実させ，家庭訪問実習と平行して実施したこと

表2　報告会 テーマ一覧

カテゴリー	H17, H18　テーマ(全20テーマ)	H19 , H20　テーマ(全18テーマ)
人間関係・コミュニケーション	私とあなた～信頼関係を築くために～ 一期一会～出会いから出逢い～ 人間関係づくりについて コミュニケーション～あなたと私を結ぶかけ橋 マニュアルのないコミュニケーション～じっくりことこと～ 生きる力～それが健康に与える影響	高齢者との円滑なコミュニケーションの図りかた 実習で得たことをどのように生かすか
健康	健康って何だろう？心と体の健康のために 高齢者の考える健康と私たちの考える健康 健康 高齢者の健康について 健康を支える3つの柱 健康についての考え方	健康でいるために 高齢者が健康を保てている秘訣 高齢者と学生の健康への考え方・取り組み 健康に対する意識と健康との関係 生活習慣と健康について 元気な高齢者から学ぶ健康の秘訣 心の状態と健康
生きがい	生きがい～精神面・日常生活面・健康面～ 生きがいとは～健康との関係～	
社会制度	高齢者の暮らしを支える社会のしくみ～年金と老人ホームを中心に～	
地域の理解	なぜ深い！？鳶巣のつながり	
生き方・人生	時代を超えても変わらないもの 経験から学んだ生き方 高齢者が大切にしているもの 高齢期を迎えて～第二の人生を楽しむ	幸齢の秘訣 心豊かに生きるために かけがえのない時間 充実した生活の秘訣 死を見据えた生き方 暮らしいきいき～年を重ねることへの適応～ 人との関わりの重要さ 高齢者とふれあうことで起きた学生の価値観・人生観の変化 学生が高齢者に教えられた事

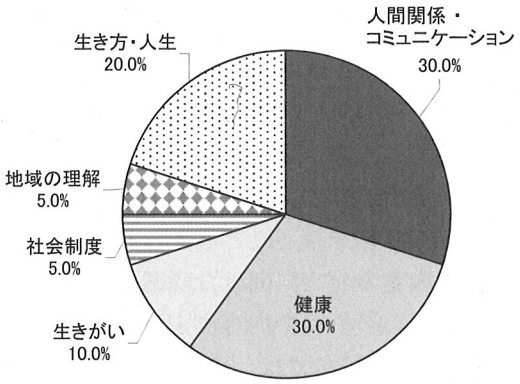

図1　平成17年・18年度 報告会テーマカテゴリー

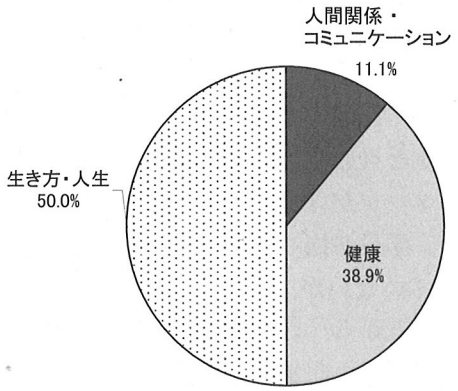

図2　平成19年・20年度 報告会テーマカテゴリー

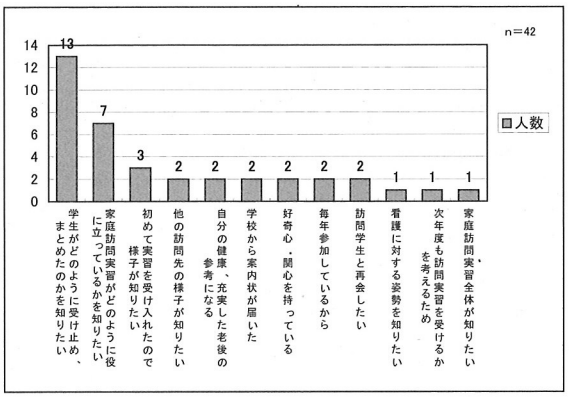

図３　報告会への参加動機(自由記述)

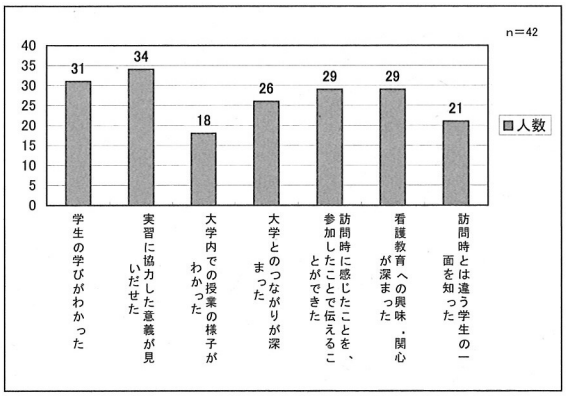

図４　報告会へ参加して感じたこと(複数回答可)

が影響していると思われる。コミュニケーション能力が向上したかを，本研究では扱わないため詳細は不明だが，実習とセミナー等を平行して学ぶことで知識，実践，評価という循環ができ，学生は話をするとき・聴くときの姿勢や態度，技術としてのコミュニケーションの活用を少しずつ積み上げることができ，テーマに取り上げるまでには至らなくなったのではないかと考える。今後はコミュニケーション能力を客観的にとらえた結果と合わせ，評価していく事が必要である。

２)「生き方・人生」について

18年度以降は「生き方・人生」に関連するテーマが増加している。ここで学生が家庭訪問実習を通してとらえている内容は，実習協力者が人とのつながりを大切にすること，役割を持っていること，感謝の気持ちを持ち生活していることなど価値観や生きがいも含めた人間観や生きざまを捕らえていた。奥野（奥野，2002）は，看護学生は高齢者を看護ケアの対象者としてとらえているため，一般学生よりも否定的なイメージを抱く傾向があると報告しているが，藤巻（藤巻，2008）は健康で自立度の高い高齢者と活動をともにする実習をしたことで，学生の持つイメージが肯定的に変化したことを報告している。学生が抱く高齢者へのイメージは今回調査していないが，「生き方・人生」が増加していることから，訪問を通して高齢者の生き方に感銘を受け，印象に強く残ったということだろう。「生き方・人生」に関連するテーマの増加は，「生活者」の定義を明らかにしたこともあり，学生が実習協力者を「生活者」としてうまくとらえられ，視点の広がりにつながっているといえるのではないだろうか。また，教員も実習目的や対象のとらえ方の整理をしたことにより明確な指標ができ，指導につながったと考えられる。佐藤（佐藤，2005）は教育と臨床のコラボレーションのなかで，看護者としては治療を受けている患者の地域での生活が描けなければ自立に向けた看護は提供できないとしている。本実習でとらえることができた「生活者」としての「人」の見方を，２年次，３年次における病院での実習の中で「患者」という見方ではなく「生活している人」としてとらえ続けられるような指導が求められる。

３)「健康」について

平成17，18年度は実習目的に「健康と生活との関連性」と明示していないが，「健康」について多く取り上げている。平成19，20年度は実習目的には明確に「健康と生活との関連性」が掲げてあり，「健康」をテーマにしているグループは多かった。看護において重要となる「健康」に関しては，学生の関心が高いことが伺える。また核家族化がすすみ，異世代間交流が減少している中で，学生は家庭訪問実習に行って自分たちが思い描いていた高齢者像とは違い，活動的で溌剌としている実習協力者の姿を目の当たりにし，どのように「健康」を維持しているのかについて興味を持ったと考えられる。

４）発表内容の充実に向けた課題

発表までのテーマや内容決定までをみてみると，特色GP採択までは，カンファレンスの時間を利用してテーマ決定に至っていたが，話し合いがうまくすすめられないグループは，空き時間を使って話し合いをすすめなければならない事もしばしばであった。また，設定したテー

マと内容がずれているというものも見受けられた。特色GP採択後はプレゼンテーションセミナーとリンクさせて，報告会のテーマやその内容の大枠を決定させているため，学生はそれらの決定方法の一つを実践してみることで，時間的短縮と思考の整理につながっているといえる。

しかし，報告会としての目的は課題探求能力を養うことにもある。中田（中田，2002）はクリティカルシンキングの定義をいくつか紹介し，Alfaro-LeFevreの「意図的な目標志向型の思考であり，憶測ではなく証拠（事実）に基づいた判断をすることを目指し，科学的原理と科学的方法に基づく」というこの「証拠に基づく」「科学的原理と科学的方法に基づく」はEBNの考えと一致していると指摘している。また曖昧な判断に頼って見つけた根拠を，対象者の意見を聞くこともなく一方的に対象者に適応させることを避けるべきと述べている。プレゼンテーションを学んだ後の学生は，実習を通して得られた事を整理し，形を整えることは上達したといえるかもしれないが，内容をみると特色GP前後ともに明確な根拠となるものを文献から調べ，比較するということは少ない。中村（中村，2007）は学生が意図的，非意図的にかかわらず獲得して得た知識を適切に処理し行動できるよう，学生の持つ力を引き出す指導者の関わりが重要だと指摘している。「課題探求」という視点に立てば内容に十分深まりがあるとは言えず，今後は学生のとらえてきた情報を「根拠」となるような学習方法やその時々での適切な問いかけなどの指導や工夫が必要である。

2．実習協力者からみた家庭訪問実習と課題

報告会へ参加した実習協力者は，参加動機から実習を受け入れた意義を見出したいという思いが強いことがわかった。実習協力者としては，自分の人生を振り返り，学生が質問してくることに答えてはいるが，４回の訪問を受け入れても，それにどのような意味があるのかを十分に見出せないでいる。報告会の場で，学生はどのようなことを学んだのかを実習協力者に伝わるよう努力してまとめ，実習協力者は報告会に参加することにより学生が何を学びとり，話の内容をどのように受け取ったのかを知る機会となっていた。学生の発表の後には必ず質疑応答の時間をとっており，異論やさらなる意見がある場合は伝えることができる。学生，実習協力者の双方にとってこの実習の意義を感じることができる場となっている。このことは先述した「対象者の意見を聞くこともなく一方的に対象者に適応させることを避ける（中田，2005）」ということを実践できているといえる。

しかし，実習協力者からは文章ではきれいすぎであり，学生各人の１～２分程度のスピーチが聴きたい，発表会後の全体会の時間をもう少し長くしてほしいといった要望も寄せられている。報告会での発表は，個人情報の観点からも個人が特定されないような配慮もしており，実習協力者としては，自分の所で実習をした学生がどのような学びをしたのかということがはっきりしないということである。できるだけ実習協力者の方の要望に答えられるよう，全体会での意見交換の方法や内容などを検討していく必要があると思われる。

Ⅶ．結論

1．特色GP採択後には「人間関係・コミュニケーション」に関するテーマが減ってきており，コミュニケーションセミナー等の開催による学生のコミュニケーション能力の強化と実習を平行して行なった結果であると思われた。
2．「生き方・人生」に関するテーマは増加しており，「生活者」としてうまくとらえられ，視点の広がりにつながっているといえた。
3．「健康」に関するテーマは特色GP採択に関係なく多く取り上げられており，学生は看護において重要なキーワードとなる「健康」についての関心は高いといえる。
4．プレゼンテーションセミナーを報告会のテーマ設定とリンクさせて実施することにより，時間短縮と思考の整理につながっていた。
5．実習協力者は報告会に参加し学生の発表を聴くことで，訪問を受け入れた意義を確認する事ができていた。

6．今後の課題として①「生活者」としての視点の広がりを２年次，３年次と継続して持ち続けられるような指導，②学生のとらえてきた情報を「根拠」となるような学習方法やその時々での適切な問いかけなどの指導や工夫，③実習協力者の要望に添えるような報告会の運営などが挙げられた。

引用文献

藤巻尚美，流石ゆり子，牛田貴子（2008）：「健康高齢者実習」プログラムに高齢者擬似体験を組み入れた学習効果（第２報）－高齢者の活動性・自立性のイメージに焦点をあてて－，山梨県立大学看護学部紀要，10，93-101.

長崎雅子，吉川洋子，曽田陽子，若林由香（2000）：家庭訪問実習の満足度の要因－学生と訪問対象者のアンケート調査より－，島根県立看護短期大学紀要，5，35-40.

中村郷子，古瀬みどり（2007）：看護系大学学生の卒業研究における課題探求のプロセス，日本看護研究学会雑誌，30(1)，89-94.

中田康夫（2002）：EBNとクリティカルシンキング，看護教育におけるクリティカルシンキングをどう活かすか，看護教育，43(11)，966-970.

奥野茂代（2002）：老年看護における高齢者観の再考，日本老年看護学会誌，7(1)，5-12.

佐藤久美（2005）：生活者の視点が原点，日本精神保健看護学会雑誌，14，115.

吉川洋子，長崎雅子，曽田陽子，若林由香（1998）：基礎看護実習における生活者としての対象理解－「全体像」の分析を通して－，第29回日本看護学会論文集－看護教育－，100-102.

吉川洋子，曽田陽子，長崎雅子，木村幸弘（2004）：地域と連携した基礎看護実習の成果，島根県立看護短期大学紀要，9，15-24.

Changes of Learning of Students and Problems in Basic Nursing Practicum Report Meeting

Ayako MATSUOKA・Yoko YOSHIKAWA・Ichie MATSUMOTO・
Kazumi TAWARA and Yuka HIRAI

Key Words and Phrases： basic nursing practicum, home-visit, report meeting, a problem research, living individual